

# 第2回北海道 乾直圃場ミーティング



実りの秋を待つ乾直稲

▶9月4日  
(北海道妹背牛町)

## 乾直人、 収穫を前に集結！

北海道で乾直人とは、水稲乾田直播を栽培する人のことだ。9月4日に「乾直人の圃場ミーティング」と銘打った乾直人の集いが開催された。腕に覚えのある者、最近乾直人にデビューした者、これから目指す者——今年1月に開催した乾直セミナー以来、8カ月ぶりの再会である。実におよそ60名の乾直人が妹背牛町に集合した。集合時間の14時、暗雲が立ちこめるなかミーティングは始まった(写真1)。

この日のミーティング会場を提供してくれたのは、妹背牛町で水稲乾田直播8年目の田村裕良氏と、同じく6年目の辻村靖氏である。

## 自称「しぐじり先生」、 今年はななつぼしに挑戦

私自身、田村氏の圃場を見るのは今年が初めてである。案内してくれたのは、ななつぼしを作付けした試験圃場だ(写真2)。北海道では早生の品種でなければ直播栽培はできないとされているが、ななつぼしは中生種。見事に生育しているものの、稲姿は青さが目立ち、実りきるかが心配であった。田村氏は「試験はやってみないとわからない」と、あく

まで自らの目で、収穫が可能であるかを確かめたいようだ。

実は、ミーティング当日に田村氏から新しい名刺を頂戴した。その肩書きをよく見ると、「北海道乾田直播技術向上委員会 委員 しぐじり先生」とある。

思い返せば8年前、田村氏が乾直の試験を始める際に応援に駆けつけた私は、袋に入ったままの予備の乾籾(乾いた状態のまま、発芽促進のための種子浸漬をしない籾)を見つけて、「これも播種して試験しましょう」と図々しく提案したのだ。いまでは、北海道の乾田直播でも乾籾が主流だが、当時は老舗の直播団地である岩見沢でも数名が試験している段階だった。振り返れば、初めて乾田直播に挑戦する人に、ひどい提案をしたものである。

それ以来の長い付き合いとなったが、国営基盤整備の大区画圃場で苦戦を強いられたこと、除草が遅れた際の様子、北海道で記録となる6月に播種した経験などを踏まえて、直播への思いを語る田村氏は、本当に参加者に役立つ先生であった。15分ほどの解説のあとは、フリーの時間。久しぶりの再会を楽しむ人、技術談義をする人、今年の反省を語る人など、参加者それぞれが思い思いに過ごした。

## 着実に王道まっしぐら

15時になって移動した先は辻村氏の圃場である。長くなるが、辻村氏との出会いから話そう。妹背牛町は、湛水直播の北海道の王者で、その歴史はかれこれ約25年になる。普及指導員時代に22歳の新人の頃から時間を見つけては、技術を学ぶために足を運んでいた地である。

その後、私は岩見沢で乾田直播の普及に関わることになり、8年前に田村氏の試験に関わった私は、妹背牛直播研究会の役員さんから直播講演会の講師を依頼される。率直に「乾田直播が中心となりますよ」とお話ししたのだが、土づくりやGPSを利用した測量なども直播の種類に係らず役立つ情報だからと言われ、快諾した。

当日、講演を始めると、前列にビデオカメラを回しながら、話に聞き入る人が目に入る。関係機関の人か、報道の人かと思いつつも、冗談も交えて話を進めたのを覚えている。講演終了後に話をすると、「普通の水田農家だが、この技術を待っていた」と答えが返ってきた。そのビデオカメラの彼こそが、辻村氏である。目の輝きなどではない。体にオーラを纏っていた。過ぎた出来事を誇張し、大袈裟に表現しているのではな



1 開始前は空に暗雲が立ち込め、天候の回復を祈る参加者ら 2 会場を提供してくれた田村裕良氏、今年は中生種のななつぼしで試験栽培を行なっている  
3 4 2番目の視察圃場で概要を紹介するのは辻村靖氏。4haの大区画圃場で均一な稲が育っている 5 いまではお馴染みの「田んぼにトラムライン」の景色。まだ本州ではもったいないの声も聞くが—— 6 のどかな田園に異様な車の列が出現した。全道、本州からも参加者がいた 7 SNSの情報拡散で、約60名が集結する賑やかな会になった

い。彼は本気だったのだ。以来、全国あちこちのイベントで、一緒に過ごす機会が多くなり、昨年はイタリア農業機械展（EIMA）の視察にも一緒に出かけた。

辻村氏の圃場も今年初めて立ち寄ったが、一区画4haの大区画圃場で稲の生育がみごとに揃っていた（写真3）。今年は経営面積も増えたようだが、どの圃場も不揃いはないという。まさに王道まっしぐらといった感じの高い技術力を持ち、圃場概要の説明は満点で、ドローンを飛ばしては話題を広げ、あつという間に予定の1時間が過ぎていた。

## 「田んぼにトラムライン」が見慣れた景色に

今回のミーティングの見どころを紹介しよう。まず一つ目はトラクターの走行跡、トラムラインである。もはや稲の生育途中の田んぼにトラクターで管理作業に入ることに抵抗感も、違和感もまったくないようだ（写真4）。参加した乾直人もまた、その景色を見ても当たり前としか思っていない。田村氏も「慣れたよ」と話してくれた。そういえば、牽引式の6000リットルのスプレーヤーを乾直圃場に入れる人もいるくらいである。これも海外の常識、日本の非常識であろう。

二つ目は、自動車の数である。妹背牛の農道は大渋滞し、水田地帯に似つかわしくない光景であった。公共の交通機関で、圃場ミーティングはできない。遠くからの参加者も増えれば、自動車の数も増える。来年は北海道警察に届け出て、この行事を企画することしよう。

そして、最後はなんとも和気藹々とした雰囲気である。それもそのはず、皆日頃からSNSで情報交換を密にしている仲である。今回の企画もSNSで情報を拡散し、参加者を募った。広い北海道内の距離を縮めるのに一役買っているのは、確かなようだ。

今回のイベントは私と有志のメンバーが相談して開催した集まりだったが、各地区からも簡単な報告をしてもらった。そして、継続的な開催を目指して、名寄、留萌、妹背牛、岩見沢、当別、むかわ、北斗の各地から委員を募り、実行委員長兼事務局長を私が引き受けることとなった。今後は年2回、乾直の技術向上のための圃場ミーティング（夏期）と、同窓会を兼ねた冬期の乾直セミナーを予定している。次回は来春1月22日（月）に乾直セミナーを開催予定である。この会で、乾直人のつながり、新たな出会いが広がるよう望むばかりである。（齊藤義崇）